

No.68 宮島 達男 「Luna」

Tatsuo Miyajima

北川フラムさんのコラム / 1996 (平成 8) 年 12 月 15 日付 立川市市報記事より

女優の真野響子さんが、NHK・TV「日曜美術館」の撮影でファーレ立川に来られたとき、「ルナ」と題された、数字が変化する換気塔を見て、神様の時計盤だと言って喜んでおられた。高さ 10 メートルの換気口の上部 4 面に 144 個の発光ダイオードが据え付けられていて、それらの数字が 1 から 9 まで順番に変化する。しかも、それぞれの変化のスピードが違っている。一番速いのは 10 分の 1 秒ごと、一番ゆっくりなのは 1 時間に 1 回の変化である。この変化するスピードの違いが美しいハーモニーとなって私たちを誘ってくれるのだ。赤と緑の数字が夜の闇の中で、変化する美しさは格別で、極めて科学的、光学的のものがヒューマンな表情をたたえているかのようである。換気塔がこの街のありかを伝えるサインになっているのである。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

「Luna」について

人類が、時を測りはじめてどのくらいたったのだろう。

おおみたから日本においては水時計の歴史が古く、『日本書紀』に「初めて漏刻を計る。民をして時を知らせむ」との記述がある。7 世紀のことである。

時間を測るのは、自然の力を使うことが多かったようだ。

そして天文学によってより正確な時間を測れることになる。月も時間を測る重要なファクターになっていたことはよく知られている。

人類が時間を測っているうちはよかったが、時間が人類を測りだしたのはいつ頃からだろう。

初めて機械時計が出現したのは 13 世紀末、ヨーロッパに於いてであるといわれる。

そして 14 世紀中頃、イタリアのバドバに公共時計が設置される。

さらに 15 世紀機械時計がヨーロッパに普及し、定時法が採用される。

このあたりから、人々の労働や生産が時間によって測られるようになったと考えられている。

現在では、私達のまわりに時計が満ちあふれ、私達を常に監視しつづけるように思われる。

私は時間をテーマにして「Luna」を考えた。

私の時計は、バラバラの時間、144 個から構成される。

それは、デジタルな数字で、1~9までカウントし、また 1 に戻って繰返す。そして“0”は表記されない。

カウントするリズムは、1/10 秒の速いものもあれば、1時間に1つしか進まない非常に遅いリズムのものもある。

1884年、イギリスのグリニッジ天文台に“0”子午線が設置され地球の時間が便宜上統一された。しかし、物理学、数学の発達により「時間」は単独に存在する不変のものではないことが明らかになってきた。

時間は人間の観測に不可分で関係している。

私の作品は、観る人々の内的時間と対応している。

それは観る人々がいて、はじめて成立する時間なのである。

私は、様々な個性を持つ一人一人の内的時間の総体がほんとうの「時間」ではないかと考えている。

その意味で、この作品は、鏡のようなもので、観る人々の内時間を写しだす装置であるといえよう。

「Luna」とは英語で月のこと。

月はまた自ら光る恒星ではなく、太陽の光を反射する鏡なのである。

私はこの作品を、夕方から夜にかけてだけ見せようと思っている。

なぜなら、昔の人が月を見て、時に想いを馳せたように、本当の「時間」を想うには、夜の暗闇が最もふさわしいからである。